

# 《2013年2月例会報告》

【日 時】2013年2月22日（金）19：00～21：00（その後「ルン」～0：30頃）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】欧州チャンピオンズカップの成立

【演 者】田村修一（フットボールアナリスト）

【参加者（会員）18名】阿部博一（日本サッカー史研究会）、井上俊也（大妻女子大学）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、金子正彦（会社員）、菊地悟（(株)角川書店）、小池正通((株)La Esperanza)、小池靖（ビバ！サッカー研究会／浦和文蔵サッカースポーツ少年団）、河野博文（(株)アクオレ）、小林俊文（群馬県立渋川青翠高校）、白髭隆幸（国際スポーツプレス協会会員）、竹内傑（早稲田中学・高等学校）、田中理恵（サッカーファン）、田村修一（フットボールアナリスト）、徳田仁（(株)セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）、中西正紀（RSSSF）、松戸宏輔（会社員）、武藤豊（ヨココム NPO）

【参加者（未会員）8名】今廣佳郎（(有)JLA ASIA）、奥崎覚（(株)コリー）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）、齋藤宣彰（(有)JLA ASIA）、高木麻仁（(株)文藝春秋／Number）、新島翔志（明治大学）、満永秀治（キョーリンメディカルサプライ(株)）、山内直（浦和レッドダイヤモンズ(株)）

【報告書作成者】中塚亮太

\*\*\*\*\*

## 欧州チャンピオンズカップの成立

田村修一（フットボールアナリスト）

\*\*\*\*\*

### < 目 次 >

#### I. プレゼンテーション① 開幕前夜

1. はじめに
2. 登場人物
3. 時代背景
4. 質疑応答 I

#### II. プレゼンテーション② 第1回大会開催まで

1. 各クラブの反応
2. レギュレーション草案の作成
3. 主催者は？－レキップと FIFA、UEFA との調整
4. レキップから各クラブに招待状を送る
5. 質疑応答 II

#### III. ディスカッション

1. 主催者としての UEFA とは
2. レギュレーションについて－引き分けは再試合？PK 方式？アウェイゴール？
3. フェアーズカップのその後
4. 外国籍選手について
5. テレビ放送との関係
6. 政治的背景と交通事情
7. フランス人の構想力
8. 娯楽に飢えていた時代
9. おわりに

## I. プレゼンテーション① 開幕前夜

### 1. はじめに

今回はチャンピオンズカップの成立ということですが、バロンドールも同じ時期にできました。バロンドールは、フランス・フットボール誌のプライベートな表彰です。チャンピオンズカップと同じレキップ社ですが、チャンピオンズカップの方が先にできて、そのあと時間の経たないうちにバロンドールができました。バロンドールのできた経緯ははっきりわかっていないです。何となく、いつの間にかそういうのを作ろうというのが編集部の中で話になっていて、いつの間にか話がまとまったということで、中にいた人間もどのような経緯で作られたのかは曖昧なままで、はっきり説明できていません。これに対し、チャンピオンズカップの方は非常にはっきりしています。事実関係はほぼ明らかになっていて、なおかつヨーロッパ、特にフランスでは、レキップと4人のジャーナリストが中心となって作ったものなので、レキップの中では非常にはっきりしておりまして、レキップが2005年に作った『ヨーロッパカップの50周年』の中にも詳しく書かれています。これ(チャンピオンズカップ設立の章)を書いたのは、ジャック・フェランという、4人の中でただ一人生存していて、去年僕が話を聞いたジャーナリストです。彼はもうすぐ93歳になるのですが、モンパルナスのアパートで一人暮らしをしており、体も頭も非常にはっきりしていて、しゃべりもすごくしっかりしています。去年2回話を聞いたんですけど、こちらがあまり準備をしないで行ったので、話を聞くにしても突っ込んだことまで聞けたわけではなくて、そのあと日本へ戻ってきて録音を聞き直してみたりだとか、あるいはいろいろな資料を見てみたりしてみると、もっといろいろと突っ込みどころはあったなと思います。そういう話をまた聞ければいいなと思いつつ、今回は今ある材料で話していけたらなと思います。

まず資料をお渡しします。これは1954年12月15日のレキップのコピーなんですけど、一番右上にある記事っていうのが、ガブリエル・アノという人が書いた「ウルブスは世界チャンピオンではない」という、チャンピオンズカップを作る契機となった記事です。あとでまたちゃんと説明しますが、最初の方では試合の分析をしていて、最後にちゃんとした企画をするならちゃんとやるべきだとあり、クラブワールドカップを作ったらどうだということを最後に提案しているわけです。1954年にレキップでそういうことをやろうということになったとき、ジャック・フェランは34歳でした。ですから、4人の中ではダントツに若かったんですけど、そのフェランが大会のレギュレーションの草案を作りました。15項目からなるレギュレーションなんですけど、これがその草案のメモのコピーです。本人の手元にもオリジナルはなくて、UEFAに貸したらそのまま戻ってこなくなったと言っていました。何が書いてあるかは僕もちょっと読めていないんですけど、とりあえずこんなものだとして見てもらえればということです。あとこれは『ヨーロッパカップの50周年』の本で、最初に登場人物の紹介をしようと思うのですが、写真のあるところに付箋を付けておりまして、最初がガブリエル・アノの写真で、次の付箋がアノの書いたウルブスの記事です。3番目の付箋が4人のジャーナリストそれぞれの写真で、最後の付箋がグスタフ・セベシュというハンガリーの代表監督で、当時ハンガリースポーツ省の副大臣をやっていた人と、サンチャゴ・ベルナベウというレアル・マドリードの会長の写真です。この2人の協力というのがチャンピオンズカップを作るうえでとても大きな力となります。セベシュの写真の反対側にあるのが、1955年の4月なんですけど、レキップの選んだヨーロッパの主要15クラブの代表が集まって最後の会議を開いたんですけど、その時の様子です。今回は歴史の授業というか、サロンも中村覚之助のことをい

ろいろやっていたように、ヨーロッパのサッカーにも歴史があるということです。うんちくっぽくなくなっちゃうかもしれないのと、こちらもバタバタしていた中でやったので話が上手くまとまっていないかもしれないので、質問があったらまたあとで聞いてください。

## 2. 登場人物

まず、馴染みのない人物がいろいろと出てくるので、登場人物の紹介をしたいと思います。

まずレキップ社の4人のジャーナリストです。1枚目がガブリエル・アノという最初に記事を書いた人なんですけど、有名な割にデータベースを探してもあまり写真が見つからなくて、こんなのしかありませんでした。彼は19世紀の終わり、1989年に生まれた人なんですけど、1954年当時すでに65歳で、4人の中では一番の年上です。当時からもすごく有名なジャーナリストだったんですけど、経歴はもともとサッカー選手であったのと同時に、当時は大学まで行っていました。勉学の方ではフランスもそうなんですけど、ドイツとイギリスの大学両方出ているので、ドイツ語も英語もペラペラだったというわけです。なおかつドイツの大学に行っていたときには2年間ドイツのクラブでプレーしていました。そして18歳のときに初めてフランス代表に選ばれています。ちょうど30歳のときに現役を引退するんですけど、その間に12キャップで3得点と、それなりの実績を残しているのに加え、第一次世界大戦のときには空軍のパイロットとして従軍し、ドイツに撃墜されて捕虜になってしまうんですね。で、ドイツの捕虜収容所に入るんだけどそこを脱走して、フランスまで歩いて帰るということをやっている人です。それでなおかつ、サン＝テグジュペリと仲が良く、彼の作品にも影響を与えているといわれています。それ以上になかなかすごいのは、レキップに入社したのは1946年なんですけど、46年からフランス協会の技術委員長とフランス代表監督を同時にやったんですね。代表監督でなおかつ技術委員長、まあ技術委員長といっても主たる目的は指導者の養成ですね。だから第二次大戦後の主だった監督は、大体みんなアノのもとで研修をして、それで監督のディプロマを取得しているというわけです。そういうことをやり、なおかつジャーナリストで試合の取材もするし、かつ編集長で編集もするというをやっている、だからどういうことかという、自分で選手を選んで自分で試合をして、その批判記事も自分で書いているという人なわけです。最初はフランス代表の成績も悪くはなかったんで、勝ってる間はそれで良かったんですけど、負けたときには自分の負けた試合の批判、まあ当時は戦術とかは大したことなかったんで選手批判になるんですけど、自分の選んだ選手の批判も自分がしなくてはならないということになるわけです。1949年にスペイン代表にホームで1-5でボロ負けしたとき、レキップで匿名で批判記事を書いたんですけど、それでもさすがにまずいということになって、代表監督だけは辞任してジャーナリストに専念するようになりました。まあ技術委員長は続けていたんで指導者の養成というのはそのまま続けていたんですけど、そういうすごい人なわけです。彼は、この当時からすでに長老的というか、レキップとフランス・フットボールは当時編集部が一緒に、同じ人間が両方に記事を書いていたんだけど、彼はその当時から別格の存在でした。

右側の方がジャック・ゴデという当時のレキップの編集長で、54年当時は50歳。この人は父親が新聞記者で、オートというレキップの前身の新聞を作ったのが彼のお父さんです。1905年生まれなので、1924年にオートに入社してジャーナリストになって、サッカーもそうなんだけれどどちらかというと自転車のエキスパートで、28年からツール・ド・フランスの取材を始めて、36年には彼自身がツールの組織委員会のディレクターになりました。ツール・ド・フランスっていうのはレキップ社が主催の自転車

レースなので、そのディレクターに就任して、36年から87年までディレクターを務めました。1944年にオートが発売禁止になり、46年に「レキップ」と名前と体裁を変えて再出発するんですが、その当時は毎日じゃなくて週3回発行だったんですね。そのレキップの創設者の一人でもあります。ちなみにこの左にいるのがサンチャゴ・ベルナベウというレアルの会長です。

次にこの右の方の写真なんですけど、これの右側に写っているこれがジャック・フェランという僕が話を聞いた人で、当時はまだ30歳くらいなので若かりし頃の写真です。ちなみにこの左にいるのがエッベ・シュワルツという当時のUEFAの会長で、デンマークの人です。次にフェランなんですけど、彼は当時34歳。1948年にレキップに入社して、ガブリエル・アノの薫陶を一番受けた人で、アノもフェランのことを随分可愛がったんですね。やっぱりジャーナリストとしての能力に長けていたからだと思うんですけど、非常に可愛がられて、それで能力も発揮しました。普通だったらこんなに若くてここまでのところにはいかないんだけど、そういうふうな感じで仕事をしていました。これが現在の彼で、彼の自宅で僕が撮ったんですけど、さすがに年寄りだけれどもしっかりしています。これはフランス・フットボールの歴代の発行人・編集長・副編集長と印刷やデザイン関連専門の人を示した系図なんですけど、フェランが編集長に就任したのは55年で、60年代の初めには発行人という一番偉い人になるんですけど、それで85年までそれを続けまして、その間に週刊誌なんですけど1500本以上の巻頭言を書いています。「フランス・フットボールの法王」みたいに言われていて、発言力と影響力がとて大きかった人です。スポーツジャーナリストのポジションというのは、ジャーナリズムの中でも相対的に低いんですけど、それを高めようとしていた人で、1988年にはレジオン・ドヌール勲章をもらってはいます。

最後の一人がジャック・ド・リズウィックなんですけど、この人は1904年生まれで54年当時は50歳。46年からレキップ紙のサッカー担当のチーフをしていました。ガブリエル・アノがウルブスの批判記事を書いた翌日に、サッカーのクラブのワールドカップの話をもっと具体的に提唱したのが、このジャック・ド・リズウィックです。

レキップ側からはその4人で、それ以外は、先ほども言いましたサンチャゴ・ベルナベウで、1943年から78年までレアル・マドリードの第11代会長を務めました。レアルの一番良い時代を作った人です。彼はフランス語がしゃべれたというのがありまして、レキップの記者たちと親交を深めるようになったというのはチャンピオンズカップの設立の話が出てきてからなんですけど、非常に協力的でした。彼の協力がなければ、まず立ち上げることはできなかったのではないかと思います。

もう一人はグスタフ・セベシュというハンガリー代表の監督で、ハンガリースポーツ省の副大臣も務めていました。54年当時のハンガリーは史上最強チームといわれていて、今でいうとバルセロナみたいな感じだと思うんですけど、スーパーなチームでスーパーな選手を作り出すシステムをハンガリーが作ったというふうに言われていました。だから、バルセロナはカンテラから選手が出てきてああいうスーパーなチームができるわけじゃないですか。そういうことを彼はやったと当時言われていて、それほど突出していたわけです。実際はハンガリーの動乱という事件もあってチームは突然弱くなってしまい、彼が作り出した選手育成システムとかサッカーっていうのは結局は人だった、永久に強いチームを作れるシステムができたわけではなく、人が良かったからそういうサッカーができたというふうに後になって評価が変わってきました。ただ、チーム自体のレベルはいまだに非常に高く評価されていて、フェランも言っていたんですけど、彼が今まで見た中で特別なチームは4つあると。1つがそのハンガリー代表で、あとは58~62年のブラジルと50年代後半のレアル・マドリード、あともう一つが今のバルセロナと言

っていました。ちなみに当時の彼らのシステムっていうのが、MM っていう、WM の変形みたいに日本では言われていますが、ヨーロッパではこれが 4-2-4 システムの始まりだと言われています。ブラジルの 4-2-4 は、54 年のワールドカップでハンガリーを見て、そこから研究して作られたものだというふうに言われています。

セベシュとハンガリーとレキップとの関わりなんですけど、53 年にウェンブリーでイングランドに初めて勝ちますよね。その前にハンガリー代表はパリで合宿するんですね。そこで練習試合をやって 2 日か 3 日いるんですけど、そのときにフェランが練習と試合を見に行っていて、それでセベシュと親交を持つようになってウェンブリーの試合も一緒に見に行ってるんですね。それ以来セベシュとの間には親交があって、彼も非常に友好的で協力的でした（註：セベシュは戦前にパリのルノー工場で働いていた経験があり、フランス語に堪能だった）。だから、ベルナベウとセベシュの協力がなければ難しかっただろうということです。

あと 1 人がスタンレー・ラウスで、この人はもともとレフェリー出身で、FA のジェネラルセクレタリーも長くやった人です。61 年から第 6 代の FIFA の会長になり、アベランジェが就任する 74 年までやりました。彼は UEFA の創設にもかかわっていたんですけど、どちらかというところとチャンピオンズカップの設立には反対というか支持はしていませんでした。なぜかというところと彼らが別のプロジェクトを持っていたからというのが一つの理由としてあります。それはフェアズカップっていう今の UEFA カップの前身にあたるもので、それが同じ時期に立案されて実現するわけなんですけど、チャンピオンズカップとはライバル関係というか競合関係にあったわけなんです。また、UEFA 自体の関心っていうのは、後で詳しく話しますが、クラブの大会の設立ではなくて代表チームの大会、要するに欧州選手権を作るっていうのが UEFA のプライオリティーとしてあって、クラブっていうのは彼らの視野の中に入っていなかったんですね。そういうのがあって UEFA のサポートっていうのは得られなかったんですけど、特にその中でもラウスに対してはフェランも相当容赦なく言うし、書くし、書いてるものを読んでもものすごく辛辣に書いているんですよね、ラウスだけは。個人的な恨みが何かあったのかなっていうくらい容赦ないというか、突き放して書いている感じです。

あと他にはジュール・リメですとかアンリ・ドロネーという人がいます。リメはワールドカップの創設者で、アンリ・ドロネーはユーロの創設者、まあ実際に関わったのは息子のピエール・ドロネーという人の方なんですけど、そういう人たちが話としては出てきます。

### 3. 時代背景

話が始まる 1954 年なんですけど、どういう時かっていうと、戦後が一段落したときで、スイスでワールドカップが開かれ、ヨーロッパでも復興がかなり進みつつあり、なおかつヨーロッパの経済統合みたいな動きも出てきた時期です。

サッカーについては、クラブのサッカーに関しても盛り上がりが出てきた頃です。というのは、国際大会というのはなかったんだけど、ローカルなカップ戦ではミトローパカップっていう、ハンガリーとかイタリアとかオーストリアといった中部ヨーロッパのクラブが参加するようなローカルな大会ですとか、あるいはラテンカップみたいな大会があってそういうところで盛り上がりを見せていました。あと、北とか東のクラブ、特にソビエトのクラブが冬の時期に自分のところでは試合ができず、シーズンも終わっているの、西ヨーロッパに出てきて親善試合をするようになりました。

ただ、サッカー自体に関して言えばイベントの数は多くはありませんでした。どういうことかという  
と、国内のゲームしかないから週末しかゲームがないわけですね。なおかつワールドカップも終わった  
ので、ナショナルチーム同士の試合もそうあるわけではない。新聞的にも、週末はサッカーのリーグ  
戦があるので、サッカーについて書けるのだけれども、ウィークデーに関してはサッカーの話題がない  
から紙面が埋められないという状況でした。そういう状況で、サッカーそのものにも飢えているし、サ  
ッカーの情報も足りず、情報にも飢えていると。世の中が落ち着きだして、そういうところにも人々の  
関心が以前より向かうようになって、娯楽が足りない、飢えているというそういう時期であったわけ  
です。

そんな中での 54 年、だからワールドカップが終わった後ですね、ホンベド・ブダペストがイングラ  
ンドに遠征するというので、レキップの記者たちもフランスではネタがないから見に行こうというこ  
とで、54 年の 12 月にガブリエル・アノが試合を見に行ったわけです。そこで当時のイングランドチャン  
ピオンだったウルブスがホンベドと、もう一つボロシュ・ロボゴというハンガリーのクラブ、今の MTK  
ブダペストの昔の名前なんですけど、その 2 チームと試合をやりました。それでホンベドに 3-2 で勝っ  
たわけです。ホンベドっていうのは、史上最強チームといわれた 54 年のハンガリー代表のレギュラーの  
選手が 6~7 人いるチームで、プスカシュですとかコチシュですとかゾルタン・チボールとか、ヨーゼフ・  
ボジクとかブダイとかがいました。このホンベドは 56 年にハンガリーにソ連軍が侵攻したときにちょ  
うどヨーロッパ遠征に出ていて、選手のほとんどが亡命しちゃってチーム自体が空中分解しちゃうん  
ですけど、その当時はハンガリー代表の主力を抱えたクラブで、ヨーロッパ最強チームの一つといわ  
れていて、これにウルブスが 3-2 で勝ったわけです。その前にスパルタク・モスクワが遠征してきた時  
にも 4-0 で勝ったということで、デイリー・メールが「ウルブスはクラブの世界チャンピオンだ」とい  
う記事をホンベド戦の翌日に書いたんですね。それに対して、その試合を見ていたガブリエル・アノ  
が「そうじゃない」と。確かにその試合では勝ったけど、条件が違うし、ホーム&アウェイでや  
らないと、あるいは条件を同じにしないと本当の力っていうのはわからない。シーズンオフで遠  
征に来たチームにフレンドリーマッチで勝ったからといって、それでは世界チャンピオンとは  
言えない。それならば、世界規模で最初は無理かもしれないけど、ヨーロッパの中だけでも  
クラブのワールドカップっていうのを開いて、本当のヨーロッパチャンピオンを決めるべき  
じゃないかっていうのを記事の最後のところで書いているんですね。

それがそもそものきっかけとなって、そこから話が始まって、その翌日にジャック・ド・リズ  
ウィックというもう一つの記者が具体的な提案をするわけです。その内容っていうのが、まず  
ホーム&アウェイで 2 試合やるべきだと。なおかつ週末にはリーグ戦があるから、リーグ戦  
やクラブに負担のかからない形、つまりウィークデーで、なおかつお客さんが見に  
来られるように昼間ではなくて夜に試合をやるのが望ましい。チームに関しては、リーグ  
戦を考えていたんで 12 チーム、多くても 14 チームがホーム&アウェイで総当たりを  
して、なおかつそれぞれの国から 1 チーム、協会から複数じゃなくて 1 チームを出すと。  
季節に関しては、9 月から翌年の 7 月までとし、それまでの間にそれぞれのチームが 22  
試合、ないし 14 チームの場合は 26 試合をやると。あと、できることならインターナ  
ショナル放送のテレビをスポンサーにつけたいと。テレビ放送は始まったばかりだ  
ったと思うんですけど、テレビとリンクしてやりたいと。そういう中でいくつかの  
クラブの具体的な名前を出すわけです。最初にリズウィックが 12 チーム、特に編  
集部とかで吟味したわけではなくて、一応出したんだと思うんですけど、当時のヨ

ヨーロッパの主要国の強いチームがこんな感じかなというところだと思います。のちにフェランも言っているんですけど、この中で肝になるのは2つ、レアル・マドリードとミランです。この2つの協力がなければ大会は成立しないというわけです。

#### 4. 質疑応答 I

中塚：登場人物が出そろって時代背景が大体把握できたところでしょうか。けどたぶん、聞き漏らしだったりうまく伝わっていないところだったりがあるかもしれません。ここまでのところで質問を受け付けましょうか。

ちょっと僕の方で、補足というか関連になるかもしれないけど、コメントを。きっかけになったホンベド・ブダペストにウルブスが勝った試合ってというのは54年ですか？

田村：54年の12月ですね。だからワールドカップの後ですね。

中塚：ということは、その前年にハンガリー代表がロンドンに行って、イングランド代表に勝っているわけですね。そういう背景が一つあったわけですね。

田村：そうですね。その主力を出しているホンベドにウルブスが勝ったというわけです。

中塚：遠征してきたのはホンベド側の方で、だけどそれは条件が違うわけだから、ちゃんとホーム&アウェイでやった方がいいというようなことを書いたんですね。

田村：そうですね。

〇〇：ウルブスって・・・

中塚：ウォルバーハンプトン・ワンダーラーズですね。

ウルブスには当時のイングランド代表の主力がいっぱいいたんですか？

田村：当時のイングランドの主力ってあんま僕知らないんですけど、まあチャンピオンだからそこそこ強かったと思うんですよね。リーグチャンピオンのはずなので。

中塚：ちなみに、サロンでは、2008年12月の「忘年会お宝映像上映会」で、1953年のイングランド vs ハンガリーのゲームをみんなで見たんです。その時のイングランド代表には、サー・スタンレー・マッシュューズがいましたね。マッシュューズと、それから・・・

田村：ビリー・ライトもいますよね。回した本の中にスタメン表が出ています。

〇〇：このときの14チームについてはそれほど精査したわけではないと思うんですけど、1カ国1チー

ム呼ぶという時に、例えばこれの面子でいくと、今の感じで考えるとオランダが無いなどかあると思うんですけど、このときはそういう国のレベルというのが何となく反映されてて、強い国というのがこの辺だったということですか？

田村：そうです。このあと 18 チームになるときにオランダも入ってくるんですね。だけど、例えばチェコも入るんだけど最後抜けちゃったりとか、北欧でいうとスウェーデンはこの当時強かったんですけど他が入っていません。スウェーデンだけ強くて、他はノルウェーもデンマークもフィンランドも強くないから、そういうところは端から考慮の対象になっていなかったわけです。だからほんとにこのくらいが主要国かなといった感じですね。ちなみにこれは翌年 3 月 9 日なんですけど、具体的にこれだけを選んで、ここにレターを出すんですね。要するに、こういう企画があって、それにあなた方を招待したいんだけど、それに対してどうか、という打診のレターを出して、それに対して右に星印の書いてある 3 つだけが保留したんですね。他は全部好意的な返事を送り返してきました。ミランは、ここに大きな危機があったって書いてあるんだけど、それが何だったのかはよく分かっていなくて、実際後から参加しているからこのときだけだったと思うんですけど、スコットランドに関しては、最終的に参加するんだけど、結構ずっと保留状態が続くんですよ。ソビエトのチームに関しては、最終的に協会の同意を得ないと自分たちでは判断できないということで、参加を見送るんですね。そういう違いはあるんですけど、一応さっきは 14 だったじゃないですか。これはいま 18 で、だからまあこれくらいが本当にヨーロッパの主要国なのかなとおもいますね。この中で面白いのは、ザールがあるんですね。この後すぐにドイツになっちゃうんだけど、当時はドイツの中で独立していて、ザールのチームも選ばれているんですね。

中塚：(配布資料では) 54 年ってなってるけど 55 年じゃないですか？

田村：あ、そうですね。そこは 55 年の間違いです。

阿部：たぶんさっき中塚さんが言おうとしていたのはアルフ・ラムゼイじゃないですか？ イングランドの監督になった。

中塚：あ、ラムゼーか。そうです、そうです。失礼しました。

## II. プレゼンテーション② 第1回大会開催まで

### 1. 各クラブの反応

これはだから具体的にレターを送るんだけど、その前の段階でアノとリズウィックの記事が出た後の反響っていうのもあって、その中で例えば同じスペインでも、バルセロナはすごく消極的なんですよ。それはカタルーニャ協会も FC バルセロナも消極的なんだけれども、マドリードはなぜか積極的なんですよ。それは、クラブも協会もメディアも。たぶん政治体質とかいろんなことが絡んでいるとは思いますが、あとイングランドは比較的熱が低いとかもあるんですが、総じては、非常にいいアイデアだというふうには捉えられていて、問題はだからクラブへの負担、あるいは協会への負担、リーグ戦との兼ね合いとか代表との兼ね合いとか、そういうところでの負担が増えないかということが一番の懸念材料でした。あとドイツなんかでは、ナイトゲームだと照明設備がまだそろっていないから、そういうところの経済的問題とかインフラの整備の問題もありました。そういうところの問題はあるけれども、こういう大会をやるということに関しては、どこも非常に好意的にとっていました。それで結局レキップとしても、個人としてのアイデアだったのが、新聞社そのものの総意としてこの企画に取り組むというふうになって、話を進めていくわけです。

フェランも言っていたんだけど、だから手ごたえは感じていたと。実現すれば必ず人気が出るということはわかっていたというふうには言っています。クラブもまあいいと。じゃあいったい誰がやるかという問題ですよ。

### 2. レギュレーションの作成

クラブの方からいい反応を得た時点で、フェランがレギュレーションの原案を起草するんですけども、それがこれですよ。15条から成っていて、要約で大体のところは分かると思うんですけど、第1条の要点としては、ヨーロッパのビッグチームによるフットボール競技会を55年からレキップ社が開催すると。名称は「Coupe d'Europe de L'Equipe」で、「ヨーロッパカップ・オブ・レキップ」みたいな感じですよ。参加するのは主催者が招待したチーム、だからリーグチャンピオンがオートマティックに行くのではなくて、さっき見せたようなレキップが選んだチームです。それはどういうのを基準にするのかというと、最近3、4年のその国のクラブの状況を見て、その中でベストと思えるチームを招待するというふうにしていました。主催や運営はどうするかというと、レキップはもともと、大会は作るんだけど、大会そのものをオーガナイズする気はありませんでした。大会の安定した存続は望むけれども、大会を主催するのは自分たちの望みではないというスタンスは一貫してとり続けています。それはメディアとして、伝える側としてやっていきたいと。最終的にビッグ・イヤーっていうのはレキップが提供するんだけど、作るものは全部作って、最後はUEFAに運営を委ねるわけです。

第2条の要点としては、16チームを招待する。形式は直接対決、つまりトーナメント戦ですよ。16チームの1回戦は、これがおもしろいところで、強豪同士の対戦を避けるために抽選ではなくて、主催者が試合の組み合わせを決めるというふうになっています。2回戦、準々決勝以降は抽選。そして決勝は1試合のみと。各チームはホーム&アウェイでそれぞれ対戦し、1勝1敗とか2引き分けの場合は得失点差で決めると。得失点差も同じなら再試合をやる。そのすべての試合は55年の8月1日から56年の6月30日となっていて、秋冬にやるわけですよ。試合の収益なんですよ。収益の配分は、5%がそ

のクラブが所属する協会、5%が組織委員会、60%が試合を主催するクラブで、残りの30%は共同口座にプールして、大会終了後にそれぞれの試合数に応じて配分するという形で、主催者はそこから利益は得ず、利益はクラブが得るという考え方ですね。第1回はこれをほぼ踏襲する形で行われ、2回以降も、1回戦を抽選じゃなくて主催者側が決めるということ以外は、翌シーズン以降もこれで踏襲されています。

### 3. 主催者は？－レキップと FIFA、UEFA との調整

どこが主催するかという話になるわけですが、レキップは自分でやる気はないと。またクラブだけではやれる力はないと。オフィシャルということ言うと、FIFA や UEFA なんですけど、最初に話に行ったのは FIFA なんですね。UEFA っていうのはまだ出来つつあるときで、UEFA が最初の総会を開くっていうのが 55 年の 3 月なんですよ。だから、まだ UEFA 自体が形になっていない段階だったので、FIFA に話を持っていったんですね。FIFA の会長はジュール・リメから、ベルギー人のルドルフ・ウィリアム・ジルドライヤーっていう人になったんですけど、この人が言ったのは、アイデアは面白いと。しかし、FIFA としては慎重にしたいと。同じような大会は主催できないと。何でできないかっていうと、FIFA が関わっているのは、FIFA の規則の中でナショナルチームの大会に関しての規則っていうのはあって、ナショナルチームは FIFA が統括するけれども、クラブに対する規則っていうのはなくて、クラブを FIFA が統括することはできないんですよ。なので FIFA からは、もちろんそういうのを作ればいいんだけど、できないというふうに言われ、なおかつ、当時は引退して病氣療養していたジュール・リメのところにも行ったんですけど、リメも、FIFA はこれだけ興味深く、情熱にあふれたプロジェクトに反対はできないと。しかし大会はクラブ自体が主催すべきだということを言って、要するに FIFA は自分たちではできないと。面白いけれども、あんたら勝手にやってね、という話ですよ。

そのあと UEFA にも行くんですね。組織としてまさにできつつある UEFA にも行くんですけど、55 年の 3 月に UEFA の総会が初めてウィーンで開かれると。それにアノとフェランが 2 人で乗り込んでいくわけですよ。パリから汽車に乗って。雪が降っていて、なおかつ汽車の暖房があまりちゃんとしていなくて、すごい寒かったと言っています。それで行って、まずなぜか知らないけどスタンレー・ラウスに会います、ホテルで。ラウスは役職としては FA のジェネラルセクレタリーなんだけれども、シュヴァルツっていうデンマーク人の会長ともそういう感じの仕事をしているのかどうか、よくわからないんですけど、隣の部屋に泊まっているんですよ。シュヴァルツとラウスが隣の部屋に泊まっていて、なおかつ内側のドアでつながっているわけで、そういうところに泊まっていて、そこにアノとフェランが会いに行くんだけど、非常につっけんどんだと、ラウスが。ラウスに会っただけで UEFA の態度が分かって、もう帰ってもいいくらいだったと言っているんですけど、結局だから UEFA も FIFA と同じように、会長が言うには、内容は面白いけれども自分たちは主催できないと。UEFA のプライオリティーはナショナルチームの大会の創設にあるということですね。ナショナルチームの大会の創設っていうのは要するにユーロなんだけれども、そこで FIFA のワールドカップとの利益の対立の問題が潜在的に出てくるわけで、そこですでに FIFA と UEFA の間の対立の先駆けみたいなものが芽生えていて、なおかつスタンレー・ラウスは個人的には UEFA よりも FIFA の会長を狙っているわけで、実際そっちの会長になるんですけど、そういう事情がありました。

また、ラウスと UEFA の 2 人の役員を合わせた 3 人がフェアズカップの設立を考えていたこともあります。フェアズカップっていうのはチャンピオンズカップとは全然違って、これは要するにヨ

ヨーロッパの各主要都市の選抜チーム同士の大会なんですね、基本的には。だから、純粋なスポーツというよりは、スポーツと興行が半々みたいな大会で、第1回大会でロンドンの選抜とかが決勝行っているんですけど、ヨーロッパの主要12都市を選んで、それぞれの都市で選抜チームを作ると。そのチーム同士でまずグループリーグをやるんだけど、地域ごとに分割して、近い地域のクラブでグループリーグをやって、2シーズンかけてグループリーグとノックアウトラウンドをやって、チャンピオンを決めるわけです。そういう大会なんだけれども、作ったところからクラブとかから評判が悪くて、それはクラブなのに都市でセレクションをするということの意味がまったく無いわけじゃないですか。だから誰もこの大会が長く続くとは思ってなくて、なおかつチャンピオンズカップのライバルになるとも思われていなかったんだけど、実際UEFAカップという形でその後も生き残っているわけで、今はヨーロッパリーグですよ。そういうふうにこの大会がここまで生き残れるとは想像できなかったとフェランは言っているんですが、その当時の状況としてラウスたちはフェアーズカップというのを考えていて、実際作っているんで、そこでのそういう対立関係というのもあったわけです。結局ラウスと会った後でシュヴァルツと話すんですけど、それはだからUEFA理事会が総会の前日であって、その理事会に行って話をするんだけど、そこでさっき言ったように、FIFAと同じような返答しかもらえませんでした。シュヴァルツ自体は翌日の総会の中でも、レキップとこういうことがあったって話はするんですね。ただレキップの方は居てもしょうがないということで、翌日にはパリに戻りました。

もう一つ、UEFAにとって誤算だったのは、自分たちのプライオリティーだったヨーロッパ選手権自体も、プロジェクトは総会で可決されなかったんですね。反対意見が出て、マジョリティーは反対で、それはカレンダーの問題とか、そういういろんな負担の問題が出てくるからってということで、ユーロのプロジェクトそのものが挫折してしまっただけで、結局それが復活するまで4年かかるんですけど、そこはUEFAにとっては、話はそれるんだけど、誤算だったわけです。逆にフェランとアノのレキップの方は、もともとUEFAの方から良い返事がもらえるとは思ってなくて、それはなぜかという、ウィーンに行く前にフランス協会とも話をしたんだけど、フランス協会も良い返事はしなくて、具体的なサポートはしなかったんですね。だからそれは協会レベルでは無理だし、連盟レベルでも無理だろうという思いがあったんだけど、ただ興味自体はだれも否定できないから、逆に自分たちが作っちゃえば、UEFAは乗らざるを得ないんじゃないかという確信を得て彼らは戻ってきたわけです。

#### 4. レキップから各クラブに招待状を送る

で、どうしたかという、次なる展開として、じゃあ自分たちでクラブを集めよう。集めて、実際に動こうということで、18選んだクラブに実際招待状を送って、呼んだんですね。その中で結局来たのは16だったんですけど、ディナモ・モスクワは駄目だと。協会が認めないから駄目だと。ハイバーニアンは電報を送ってよこして、大会自体はOKなんだけれどもちょっと行けないと。そこでじゃあ集まって何をやってかという、いろいろ歓待するわけです。このときは費用は全部レキップ持ちで、何をしたかっていうとレストランへ行って、みんな来るわけですよ。ベルナベウも来るし、セベシュも来るし、全部16のクラブの代表が来て、そういう人たちの接待をするわけですね。キャバレー（リド）に連れて行ったりとか、フランススウェーデンの試合をやっていたからそれを見せたりとか。

そういうことをしながら、会議ではレキップが原案として作ったレギュレーションが具体化したりとか、組み合わせをどういうふうにするかっていうことを決めていくんですけど、実際にレギュレー

ションに関しては、フェランの原案がほぼそのまま踏襲されました。

大会の理事会を作るんですけども、会長ですが、これはちょっとフランスでは協会がサポートできないからスポーツプロモーションの会社が全面的にここでサポートします。その会社っていうのが、元フランス代表のセンターフォワードだった人がやっている会社です。その会社の副社長を大会の組織委員長に一応据えて、副委員長にセベシユとベルナベウを置くという形にして、体裁を整えるんですね。あと委員を何人か置くという形で、組織委員会の形を整えて、なおかつ日程を決め、あと組み分けも決めるわけです。これがだから最初に決めた組み分けで、この矢印のやつは、実際のときにはこのクラブに代わっています。それでこの8試合を決めるわけです。

だから要するに形は整っていた。いつでも実際できるんだという形を整えるんですね。それを彼らは「ポーカーの一撃」と言っているんですけど、要するにUEFAに対してブラフをかますんですよ。要するに、俺たちはこれだけ整えたからできると。さあ、どうだ、ということで、最初はFIFAがそれに対して反応するんですね。このレギュレーションと組み分けを決めたのが55年の4月なんですけど、その1か月後の5月7日にFIFAの理事会がロンドンであり、そのときにこれに関する話し合いが行われて、大会を行うことをFIFAが認めるんですね。その代わり条件があると。条件を3つ出してくるんですけど、1つがそれぞれの参加クラブの協会が、クラブの参加を承認すること。2つ目はUEFAがその権威と責任のもとで大会を開催すること。3つ目は「ヨーロッパ」と名のつく大会は国の大会、だからユーロですよ、にも使えるようにすること。その3つの条件を満たす限り、FIFAも認めると。だから要するに、FIFAの方から、UEFA、お前やれということを行ったわけです。

それを受けてUEFAも5月21日、だから2週間後、パリにUEFAの理事が全員じゃないんですけど6人が来て、会議をして、自分たちがやることを引き受けると。名称は、フランス語なんですけど、「Coupe des clubs champions europeens」だから「European Champions' Cup」ですよ、英語で言うと。それで、そのスタートは来季からやると。あと、今回は16チームなんだけれども、理論上はヨーロッパのすべての国のリーグ1位のクラブが参加可能であると。ただ、第1回の大会に関しては、レキップが招待した16のクラブで始めると。なおかつその1回戦も、抽選ではなくてレキップが決めたカードで行うと。そして大会のシステム、要するにホーム&アウェイとウィークデー開催、あるいは得失点差と再試合といったシステムも、そのままやると。そしてUEFAの理事会が組織委員会も担当すると。まあそういうことを5時間くらい話し合っただけで、UEFAが引き受けるということがそのときに決まりました。それが5月です。それで翌シーズンの始まる9月4日にリスボンで最初の試合が行われます。その間にクラブの変更っていうのがあって、イングランドのチェルシーは出るつもりだったんだけど、イングランド協会がアドバイスをして、国内のリーグ戦に負担となるような大会には出ない方がいいんじゃないのということを言って、出場を取りやめました。それで代わりにポーランドのクラブを招待することになりました。他の2つはそれぞれのクラブの事情か何かだと思んですけども、そんなに大きな問題ではありませんでした。

9月4日に最初の試合、リスボンでスポルティングとパルチザンの試合が行われて、スタジアムも満員になって、大会自体が最初から成功したと。2回戦で初めて抽選なんですけれども、フェランがくじを引いたんですね。それで引き当てたのがパルチザンとレアル・マドリードの対戦だったわけです。それは大きな問題で、スペインはフランコの独裁政権じゃないですか。そういう国に対して東ヨーロッパの国がビザを出すのかっていうのが政治問題としてありました。ユーゴはチトーなんですけど、ソ連が出な

かったのと、実際出たのがハンガリーとユーゴじゃないですか。あの当時の東ヨーロッパの中では比較的自由的な体制の国だったので、ビザも出しやすかったのかなと思うんですけども、スペインに対してもビザを発給して、だからレアル・マドリードは行ったんですね、ベオグラードに。第1戦を4-0で勝ったんですけど、第2戦は大雪だったんですよ。雪がすごい降っていて、試合ができるかどうかわからない。だから試合しないで帰っちゃうのも十分あったんだけど、ベルナベウが決断して試合をやるということになって、3-0で負けたんですよ、レアルが。得失点差で上には行ったんだけど、それで試合もつつがなく行われ、大会も無事進んだということです。

## 5. 質疑応答Ⅱ

中塚：ありがとうございます。これが第1回大会ということですね。

田村：はい、そうです。

中塚：いまふうの感覚でいうと「プレ大会」のような感じがするけど、歴史的にはこれを第1回大会として、第2回大会からをUEFAが主催で・・・

田村：いや、もう第1回大会からUEFAです。

中塚：ここからUEFA主催なんですか。

田村：だから、レキップは全部形だけ整えて、ビッグ・イヤーを提供したのもレキップなんですよ。全部作ったのはレキップなんだけど、実際に大会をオーガナイズしたのは、形の上ではUEFAなんですよ。

中塚：今日の田村さんのお話は第1回大会の誕生のところまでですよ。

田村：はい、そうです。

中塚：それではみなさん、心おきなく質問してください。

### Ⅲ. ディスカッション

#### 1. 「主催者」としての UEFA とは

牛木：いま主催って言っていたけれど、フランス語では「主催者」を何というんですか？

田村：「オーガナイザー」です。

〇〇：基本的に分かっていないんですけど、UEFA っていうのはいつごろ出来たんですか？

田村：55年の3月が第1回の総会です。

〇〇：じゃあ戦後にできたわけですね。

田村：もちろん。だから戦後っていうか、戦後10年。だから54年ワールドカップのときにはまだ出来ていなかったです。

〇〇：じゃあそれまではヨーロッパを統括する団体はないわけですね。

田村：なかったですね。

〇〇：南米とかは結構早いですよね？

田村：南米が一番早いです。だから南米はダントツに早いです。

中塚：1910年代ですよ。

田村：そうそう。

〇〇：FIFA よりも前ですね。

田村：前です。コパ・アメリカだって10何年から始まっているじゃないですか。だからヨーロッパがこの時期に整ったっていうのは、やっぱり・・・

〇〇：戦争の影響があるんでしょうね。

田村：それぞれの国内のサッカーっていうのはあっただろうけど、そういう国同士の交流っていうのもオフィシャルなものはなかったじゃないですか。そういったものがこの時期に、だからグローバル化してきたわけです。

白髭：日本高校選抜が今行っているベリンツォーナ大会っていうのが、いま FIFA の公認大会になっているんですけど、あれがやっぱり戦前からやっているんですけど、やっぱり戦争時代のヨーロッパの敵対関係をサッカーで何とかうまくやろうっていうのが、スイスで最初やる意図だったらしいんですよ。政治で敵対しているんだけど、中立国のスイスで若人を呼んでやろうというのが、招待大会なんですけど、最初にやった意図だというふうに聞いたことがあります。

## 2. レギュレーションについてー引き分けは再試合？ PK 方式？ アウェイゴール？

〇〇：レギュレーションのことなんですけど、ホーム&アウェイで得失点差というか、2 試合合計で決まると。チャンピオンズカップで僕らが知識としてあるのは、「アウェイゴール」があるときから出てくるはずなんですけど、その辺のところを知りたいです。それと、さっき再試合っていうのがあったじゃないですか。再試合はどのようにやっていたんですか？

田村：3 試合目を、2 試合目と同じところでやっていました。インターコンチネンタルカップとかもそうですよね。要するにトヨタカップの前とかも、ヨーロッパと南米でやるじゃないですか。あれは得失点差もなく、1 勝 1 敗だったら 2 日後とかに同じところで再試合をやるんですよ。

井上：FIFA は結構中立地でやるようにしていますよね。50 年代になる前から。

田村：UEFA もそうか・・・。

井上：ワールドカップの欧州予選は UEFA の試合にカウントしますか？

〇〇：UEFA の試合じゃないですか？

井上：だとすると、50 年代から中立地でやってますね。第 3 戦は。

〇〇：それで決着がつかないとまたやるんですか？

田村：PK 戦がないですからね。基本的には。でも抽選で決まったってあったんですかね。でも抽選ってないですよ。68 年のヨーロッパ選手権の準決勝は抽選で決まったじゃないですか。イタリアとソビエトの。でも・・・

井上：両チームが並んだ場合は第 3 戦をニュートラルっていうのは、1950 年ブラジルワールドカップブラジル大会の予選の 1949 年に行われたフランス対ユーゴ戦はホーム、アウェイともドローで確かそうだったですよ。

田村：あ、ほんとですか。

井上：フィレンツェで、ユーゴスラビアが勝ちました。ちなみにフランスは1962年ワールドカップチリ大会の予選でもブルガリアと1勝1敗になり、ミラノでプレーオフを行い、0-1で負けています。

〇〇：ついこの間までFAカップは延々とやっていたよね。何年か前から2戦目でPKになりましたけど。

田村：そうですね。だってPK戦っていうのは74年の決勝の後でしょ。チャンピオンズカップに関しては、バイエルンとアトレティコ・マドリードの。あの後PK戦のシステムが導入されたんですよね。

〇〇：要するにペナルティシュートアウトですよ。

〇〇：高校サッカーでは北陽が優勝した年からですよ。PKになったのは。それまでは抽選ですよ。

〇〇：再試合とかでいろいろと負担が出てきてから、その後にアウェイゴールという決め方が出てきたんだと思うんですけど、その辺のことは歴史的にはどのくらいのことなんですか？

田村：あれは、調べればわかると思いますけど・・・

牛木：少なくとも僕が取材していたときですね。アウェイゴールダブルが入ったのは。だから60年代かそのくらいですね。

田村：そうですね・・・70年代はもうやってましたもんね。

中塚：「アウェイゴール2倍ルール」って聞いていたように思うんですけど・・・

〇〇：レギュレーションには2倍って書いてないんですよ。多い方が勝ちって書いてあるから。誰が2倍って言ったのか・・・

中塚：日本語に訳したときにそうなってしまったんですか。

〇〇：ただ、延長戦は「ダブル」って書いてます。なぜ延長戦だけダブルなのかよくわからないけど。

田村：ダブルってなんですか？

〇〇：要するに延長戦のポイントは2倍になる。90分間のポイントはダブルにならないで。

田村：あ～、延長戦だけ2倍になるってということですか。そんなのあったんですか。

〇〇：書いてあります。僕の読みが間違っていなければ。

### 3. フェアーズカップのその後

中塚：話戻るかもしれないけど、先ほどフェアーズカップの話があったじゃないですか。これはラウスが進めようとしていた構想で、それは実際に行われたわけですか？

田村：第1回が同じくらいに始まって、55年か56年に始まっていますよ。

中塚：それがどこかでUEFAカップに変わるんですか。

田村：71年くらい。

〇〇：昔カップウィナーズカップっていうのもありましたね。

田村：それは60年に始まって・・・

〇〇：それで吸収されちゃったんですよ。99年かそのくらいに。

田村：そうですね。ただ、カップウィナーズカップの第1回か第2回の決勝も、間2か月とか3か月とか開いているんですよ。どっちかの都合が悪くて、日程が取れなくて。カップウィナーズカップは最初の頃決勝を2試合やっていたじゃないですか。

井上：フェアーズカップは71年までです。

田村：そうです。そのくらいですよ。

〇〇：それでその決勝は、リーグとユベントスがやって、当時決勝は2試合だったんで2試合やって、結局同点で、リーグが今言ったアウェイゴール2倍換算で優勝しました。

中塚：フェアーズカップというのはクラブ対抗戦だったんですか？

〇〇：まあ、その時初めて見ましたから。私中学生でしたけど。

田村：最初は選抜チームで出てたけど、たぶん途中から出ていないですよ。

牛木：僕の記憶しているのはクラブチームですよ。フェアーズカップに出ていたのは。当時は3大タイ

トルで、一つはクラブチャンピオンシップ、もう一つがカップウィナーズカップで、リーグのチャンピオンが争うのとカップのチャンピオンが争うのがあって、そのほかにフェアシティーズカップがあったと記憶しています。欧州の単独クラブのタイトルが3つあったわけです。だけど、結局一番重要とみなされるようになったのが、クラブチャンピオンズカップで、フェアシティーズカップはいちばん地位が低かったわけです。地位が低いというのはおかしいけど、人気が低かったわけです。

〇〇：2冠のときはカップウィナーズカップは2位のチームが出るんですか？

中塚：そうですね。

#### 4. 外国籍選手について

〇〇：このときってUEFAもないくらいですから詳しくわからないんですけど、外国籍選手がいるいな  
いって、クラブごとに全然差があったと思うんですけど・・・

田村：当時は制限ないですよ。

〇〇：レアルがこの時代強かったのって、ディステファノとかいて、ガンガン活躍しているけれども、全然わからないんですけど、北欧のクラブには誰もいないということで、不公平感というか、ずるいよ、みたいなのはなかったんですか？

田村：一つには、当時プロっていうのはイギリスと、あとイタリア、スペインくらいで、他はパートタイムプロなんですよ。だから結局ベッケンバウアーだって、60年代の途中まで仕事持ってたじゃないですか。バイエルンの選手やりながら。

〇〇：物のセールスとかやりましたね。

田村：だから、その当時からお金のあるイタリアやスペインのクラブが選手を集めて、強くなるっていうのは、50年代から、あるいは戦前からあったので、それはもう当然のこととされていたから、それに対する不公平感とかはあまりなかったですよ。

牛木：初期のころは、そんなに外国籍選手はいないですよ。たとえば、スペインやイタリアのクラブにアルゼンチンからきた選手が入っていても、父親はスペイン人で二重国籍だったという例が多い。あるいは、エウゼビオのような例もある。ポルトガルのベンフィカ・リスボンのプレーヤーだけでも出身はアフリカのモザンビークです。しかしモザンビークはポルトガルの植民地だった。だから、現在の基準で外国人だったとは言えない。しかし、いまの感覚から言えば不公平ではありませんよね。イングランドなどでは、その当時は外国人選手は、規則で入れなかった。

田村：多国籍で選手を集めていたっていうのは、ほんとにレアルとかバルサとか。バルセロナなんかもすごかったですからね。あとまあミランとかね。ユベントスとか。だからほんとにそういうビッグクラブですよ。人の移動も今ほど激しくないから。フランスなんかは植民地の選手がいたし、あとポーランドの移民とかね。コパなんかがそうですよね。要するに、炭鉱労働者の移民とかが来て、だから帰化選手ですよ。でもそれはサッカーの帰化じゃなくて、移民の子弟として帰化するんだけど。

## 5. テレビ放送との関係

〇〇：ジャック・フェランという人は、レギュレーションの原案を起草したときに、今の話だとテレビ放送とのリンクっていうのがあったんですけど、実際テレビ放送が始まったのってどのくらいなんですか？

田村：もっと後ですよ。でもチャンピオンズカップの決勝の生中継をユーロスポーツがやったっていうのは、確かインテルとレアルとかの、だから 60 年代に入ってからですよ。フェラン本人は、テレビの可能性っていうのを相当前から感じていて・・・

〇〇：ものすごいですよね。

牛木：その具体的な提案の中に「テレビ」という言葉が入っているんですね？

田村：入ってます。それがもう 54 年の段階で・・・

牛木：それは非常に早いと思うんですよ。っていうのは、テレビの衛星中継っていうのは東京オリンピックが初めてですから。だから 64 年ですから。それも日本とアメリカだけです。その後かなり遅くなって今のような衛星中継が始まったわけですね。それから、テレビマネーの問題はずっと遅くて、テレビマネーが膨らみ始めたのは 80 年代の終わりごろからなんですよ。世界的に。アメリカでは割と早かったけれども、80 年代。だから 50 年代にテレビマネーってことが頭にあったかどうかは、ちょっと僕もわかりませんね。

田村：だけど、テレビ自体とのリンクっていうのは考えていましたね。

## 6. 政治的背景と交通事情

中西：遅れてきて田村さんの話に水を差すようで申し訳ないんですけど、55 年だとたぶんハンガリーとユーゴスラビアの国際状況が違ふということをちょっとだけ申し上げておきたいと思います。スターリンは 53 年に死ぬんですけど、(フルシチョフによる)スターリン批判は 56 年で、ハンガリーはまだ(ソ連の下での)スターリン主義国家なんですよ。なので、よく出てきたなと田村さんの話を伺いながら思ったわけですし、もしレアル・マドリードがホンベドと当たっていたならば、ハンガリー政府が出したかどうかは正直疑問だったと思います。ただ逆に、ユーゴスラビアは当

時もチトーが非同盟路線に入っているところで、どこの国とも付き合うというのを売りにして国際的地位を高めているというところがあったので、逆に出しやすかったのかなってお話を伺いながら思っていました。55年がバンドン会議の年なんですよ。要するに非同盟路線という。それがちょっとあったものですから、意見としてプラスしてください。

それで質問なんですが、55年、56年に大会を始めるということになるんですけど、交通事情が全く今とは違うわけですよ。特に飛行機の発達というのがどれくらい、路線としてはあったとしても、クラブチームが大会のために移動で使えるほどあったのかっていうことなんですよ。

田村：マドリードからベオグラードまでは飛行機で行っていますよ。

中西：そういうのを前提にして日程を組んでいたわけですか？

田村：まあ移動がないと無理ですよ。そういう移動手段がないと。

中西：逆に言うと、航空便がそれくらい信頼性のあるほど路線が増えたから、この構想も現実味を帯びたという考え方もできるわけですか？

田村：移動手段なしには難しかったっていうのはあるんじゃないですかね。

## 7. フランス人の構想力

牛木：逆に言えば、戦後の混乱が完全に収まっている時期でない、しかも東西対立が始まっている政治的にも難しい時期、交通事情も現在ほど便利でない。そういうようなときに、こういうフランス・フットボールの連中がアイデアを出して、実行したというところに、僕はすごいなと思っているわけです。なぜレキップの連中が、そういう難しい時期にこういう問題に情熱を燃やしたのかというのを知りたい。

田村：本人に聞いたけどわかんないって言ってました(笑)。何でそんなこと考えたのって聞いたんですけど、それはわかんないって言っています。結局(近代オリンピックもワールドカップもユーロも)フランス人が皆作っているわけじゃないですか。全然違う質問だったんですけど、例えばユーゴ人のオシムとかにも、何でお前ら球技がそんなにすごいんだって聞いても、いや分からない、と言って、俺たちはそういう能力を持って生まれてきたんだ、という言い方をしていますね。フェランは別にそうは言っていないくて、フランスは周りを全部他の国に囲まれていて、人の行き来とか圧力とかがあるから、人間関係とか国際関係みたいなのは身につくんじゃないかとは言っていましたけれども、別にそういうのがあるから俺たちがやったんだというのではなくて、何となくそうなんじゃないのというくらいの感じでした。

中塚：彼らは国際的な話し合いをするときに、何語でしゃべるんですか？

田村：アノがウィーンに行って理事会に乗り込んだじゃないですか。そのときは英語とフランス語で同じことを 2 度説明していました。彼がそこで一番気にしていたのは通訳の問題だったらしいんですよ、実は。自分はドイツ語をしゃべれるけれども、言葉をどうしようかという風になって、結局英語とフランス語になったらしいんですけど。

〇〇：昔はみんなフランス語だったって聞いていましたけど。

田村：だからこれ見ると、今はジャーナリストは大体ジャーナリスト専門学校を出ている人が多いんだけど、この人たちの学歴はみんな大学出なんですよ。文学とかの人が多いいんだけど、語学も含めて大学でちゃんと勉強していた人たちなんですよ。

〇〇：実際その大会を準備している期間、アノとかが記事に出したりっていうのは、アノが何歳くらいのときだったんですか？

田村：54 年が 65 歳です。ガブリエル・アノは。だからもう相当年配ですよ。

〇〇：というのはですね、50 年代というのは先ほどお話があったように、第 2 次大戦が終わった後に東西の緊張が始まったという政治的な背景はあると思うんですけど、例えばフランスだったらヌーベル・バーグだとか、イギリスだったらビートルズとかが出てくる前の段階じゃないですか。これははっきりとはしていないんですけど、確か 60 年代ってフランスとイタリアでは、規制の緩和があったと思うんですけど、企業の登録数が爆発的に多かったはずなんですよ。そういった中で世の中のムーブメント的に、アントロプレナーブームというか、思いついたことをやってみようっていうカルチャーみたいなのがあったような気がするんですよ。先ほどなぜ始めたのかというお話があって、わからないという話があったと思うんですけど、そういう周りの環境とか雰囲気、俺も思いついたからやってみたいな、というような雰囲気にのまれたのかなっていう気はするんですけど。わからないですけど、時代的にそういう背景は多少はあるんじゃないかなという気はするんですよ。

田村：それは確かによくわからないですよ。新しいものを作ろうというかね、復興っていても古いものを元に戻すんじゃなくて、新しい社会を作るっていう、そういう思いはやっぱりみんな強いわけじゃないですか。世界が変わるとかね。そういう中で今までと違うものというのが出てきたんじゃないかなと思うんですけど。

〇〇：時代背景というのがあって、そういうのに多少後押しされたのかなっていう気はするんですけど。ただ、もっと若いと思っていたんですよ。

田村：アノ自身は、同じようなアイデアを 1930 年代にも言っているんですね。35 年に、同じようにクラブのワールドカップをやったらどうかっていうアイデアを出していて、それは彼がその時に務

めていたオートで展開していて、戦争とかがあったりで具体的なものにはならなかったんだけど、元々持っていたものではあるんですよね。そういうアイデアっていうのは。

〇〇：ド・ゴール大統領とかが出てくるのはもうちょっと後ですよ？

田村：第5共和政は58年・・・

〇〇：もっと前です。第5共和政は58年ですけど、彼自身は42年からトップですね。

中塚：そもそも1904年のFIFA創設も、クラブ対抗っていうアイデアもあったわけですよ、当初。だからスペインはクラブの代表が出てきたり・・・その辺りは牛木さん、どうですか？ ジュール・リメの本を牛木さんが訳されているので。

牛木：サッカーは、FIFAから始まって、UEFAやAFCができて、そしてクラブができたというのではない。最初はクラブからはじまったわけです。クラブが2チームあって試合をする。それでクラブが3チーム、4チームになるとリーグができる。そういうふうにクラブから始まるわけだから、クラブの試合をやるっていうのは30年代からあって当然で、ナショナルチームの試合をやるっていう方はむしろ後から出てくるアイデアです。日本では、まるでサッカー協会が先にあって、みんな言うこと聞けっていうふうになってるけど、そうじゃない。チームがあって、リーグを作り、協会を作っているわけです。

田村：だから、結局UEFAがユーロをやるじゃないですか。あれはやっぱりクラブは協力的じゃないんですよ。結局クラブとしてはチャンピオンズカップの方が全然良いんだから、ユーロに協力するっていうのはむしろ東の国なんです。東の国ってそういうクラブの伝統がないから。ソビエトがあれだけのナショナルチームを出してきたように、60年代には東の国はナショナルチームに力を入れていたわけです。西は、イングランドも最初出さなかったし、イタリアだって最初出さなかったし、ドイツも出さなかったじゃないですか。

牛木：「主催」って言葉が日本語にはあるけど、それはフランスではどうやって使われているのか。例えば、先ほど「オーガナイズ」っていうことを言ったけど、「ジュリスディクト」って言葉が使われているのがありますよね。それはどう違うのか。日本で「主催」っていうと、すべての権利が主催者であって、すべての田舎のチームの試合までみんな日本サッカー協会主催ってなってるけど。

田村：言葉のニュアンスはすごい難しいですよ。問題として。それが具体的にどこまでのことを意味するのかというのは、すごい難しい問題だと思います。

牛木：だから「主催」って言葉は間違えるといけない。UEFAが主催するのと日本サッカー協会が主催するのでは、同じようなニュアンスでとれるかということ、そうではない。ただ「オーガナイズ」

するということであれば、実際に運営するということだから、かなり内容ははっきりしますよね。

## 8. 娯楽に飢えていた時代

〇〇：この第1回大会に観客は入っていたんですか？

田村：入ってましたね。最初からもう人気はすごかったみたいですね。

牛木：それは想像できるよね。日本でも戦後、プロ野球すごかったもんね。みんな食うものにも困っているときにね。

中塚：娯楽に飢えていた人々に、最高の娯楽が用意されたということですよ。

田村：そうですね。他の国のチームとやってヨーロッパのチャンピオンを決めるっていうのは、刺激としてはすごく大きいことじゃないですか。結局バロンドールなんかも、その比較が可能になったからヨーロッパの最優秀選手を選べるようになったんですよ。国内だけのリーグだったらそういう比較っていうのはできないですからね。

〇〇：当然各国のマスコミもみんな取り上げてるわけですよ？

田村：そうですね。

## 9. おわりに

中塚：ということで議論は尽きませんが、この後も楽しみなので、そろそろこの辺りで。最後に、冒頭でおっしゃったことですが、今回発表していただいた中身がこの後どういうふうになっていて、そのためにここでの共通の約束を、もう一度田村さんの方から教えてください。

田村：どういう形になるかまだ分からないんですけど、フェランの証言をベースに、この設立に関して雑誌で発表したいと思っているので、そんな先にはならないと思いますが、それまではあんまり表に出さないようお願いしたいと思います。

中塚：どうもありがとうございました。

【補足】ここで紹介された内容は、雑誌『NUMBER』第34巻第8号（通算827号＝4月18日発売）に「欧州チャンピオンズカップ誕生秘話」として掲載された。よって、サロン2002月例会報告も公開する（2013年5月19日）。